

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720089
 研究課題名（和文） 太平洋諸島旧植民地の比較文学比較文化研究
 研究課題名（英文） A Comparative Study of Literature and Culture in the Post-Colonial Pacific
 研究代表者
 須藤 直人（SUDO NAOTO）
 立命館大学・文学部・准教授
 研究者番号：60411138

研究成果の概要：植民地宗主国からではない、太平洋の島々から見た太平洋世界の表象における、日本文化のかかわりと意義を明らかにした。南洋群島ミクロネシアを訪れた中島敦は島の人々の世界観を問題とし、ハワイの日系人作家達はローカルな世界観を描くハワイ文学の中心にいる。南太平洋を代表する作家であるサモア出身のアルバート・ウェントやハワイ作家達は日本文化に注目する。こうした新しい表象を試みる作家達は、白人と黒人の間の恋愛・結婚・混血に関する伝統的な物語を様々に書き換えており、本研究はその系譜と意義を示した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	300,000	3,700,000

研究分野：比較文学・文化、英語圏文学、ポストコロニアル研究

科研費の分科・細目：文学一般（含文学論・比較文学）・西洋古典

キーワード：南洋、太平洋諸島、植民地、ポストコロニアル、異人種間恋愛譚、混血、中島敦

1. 研究開始当初の背景

（1）比較文学・比較文化研究において、「国民国家の文学・文化」という考え方を基本とする従来の研究から、「国境を越える文学・文化」という観点に立脚した研究へと、研究の重点が移行している。日本においても日本文学と漢文学やイギリス文学等との影響関係を問題とする研究から、「東アジアの文学」として日本文学を位置づけたり、日本文学における外国のイメージや外国文学における

日本のイメージを分析したりする研究へと
 という変化が見られる。

（2）比較文学・比較文化研究は、「ポストコロニアル研究」の影響を受けている。ポストコロニアル研究は、政治的な植民地支配が解消された後の経済的支配のみならず、支配・被支配の関係が表象やイメージという形で残り続ける文化的支配に注目する。またポストコロニアル研究では、旧宗主国の文化的権威に対する現地の側からの反応・抵抗が重要

視される。

(3) ポストコロニアル研究の研究対象として、インド、アフリカ、カリブ海域、カナダ、オーストラリア、南アフリカに比べて太平洋諸島域は未だ取り上げられることが少ない。日本における比較文学・比較文化研究においてもまた多くの場合、朝鮮、台湾、満州が対象となる。太平洋が研究対象となることが少ない要因として、欧米・アジア・オセアニアが競合・共存する太平洋世界の複雑さ、太平洋諸島が植民地として重要度が低いと見られたこと、ヨーロッパにとっては最も遠い地域で、接触が最も遅れ、一般に知識・関心が乏しいこと、が挙げられる。

(4) とはいえ、国内外において、太平洋世界への注目は増している。文学・文化研究においては、欧米諸国の植民地下に置かれた太平洋諸島を対象とする研究が見られる。日本の植民地支配下にあった地域（ミクロネシア）に関しても、主として社会学・人類学からアプローチがなされている。

2. 研究の目的

(1) 太平洋諸島の人々の世界観が、欧米・アジアの文化に影響を受けながら、それらに抵抗したり影響を与えたりしてきた様相を明らかにする。

日本が太平洋諸島ミクロネシアを統治下に置いていた1914年から1945年、それ以後現在まで、「南の海と島」という要素が日本の文学・文化の中で果たしてきた機能を明らかにする。

西洋世界や日本の文学・文化における「南の海と島」というモチーフが、太平洋諸島における文学・文化の中でどのように変容しているかを明らかにする。

太平洋諸島と日本とでは、西洋の文学・文化による影響がどのように異なっているのかを明らかにする。

(2) 太平洋諸島における文学・文化の中で「日本」「日本文化」がどのような位置を占めているのかを明らかにする。

(3) 欧米やアジアではなく、太平洋の島々に視点を据えるときに見えてくる新しい日本像を提示し、日本と太平洋諸島の文学を「太平洋の海と島の文学」と見る視角を得る。

3. 研究の方法

(1) 太平洋諸島を扱う文学作品、絵画、映画、漫画、アニメーション、歌謡、教材、案内書、旅行記等の記録の収集分析を行った。日本・西洋・太平洋の三者間の比較研究を行った。

(2) 欧米世界とその植民地を対象とするポストコロニアル文学・文化理論を応用して、比較文学・文化的アプローチにより、日本文化と太平洋諸島の文化との相関関係を論じている。日本にとっての太平洋諸島、太平洋諸島にとっての日本という、双方向性を持たせた。

(3) 日本がミクロネシア（南洋群島）統治を行った当時の日本側の資料の収集については、太平洋諸島地域研究所のアジア太平洋資料室（東京都）を利用した。

(4) 太平洋諸島と日本とのかかわりをテーマとする国内の博物館・美術館における展示会資料を参考とした。「Feu Nos Peres ニューカレドニアの日系人 ラウデー収容所からの手紙」展、「パラオ ふたつの人生 鬼才・中島敦と日本のゴーギャン・土方久功」展、「美術家たちの「南洋群島」」展など。

(5) 欧米における太平洋諸島の文化の輸入やそのイメージについて、英国ロンドンの大英博物館・図書館をはじめとする博物館・美術館、および米国ロサンゼルスのアジア太平洋博物館、日系博物館等の博物館・美術館を訪れ、資料収集を行った。

(6) ミクロネシアのパラオ、サイパン、テナアンを訪れ、博物館、遺跡等において現地民から見た欧米や日本とのかかわりの歴史観を調査した。とりわけパラオにおいては、戦前に彫刻家土方久功がパラオで考案し、戦後代表的な土産物としてパラオの「ナショナル・アート」となったストーリーボード（板彫り）の制作について調査を行った。

4. 研究成果

(1) パラオのバイ（伝統的集会所）、ストーリーボード（板彫り）、パラオ人リー・ボーの伝説と日本文化の相互的な影響関係やイメージの往還を、「脱植民地化」という文脈

において考え、その意義を明らかにした。

パラオのバイは、自然や社会との結びつきを象徴する建築物であり、世界との関係を取り結ぶ場所である。だが植民地支配と観光はバイを「卑猥」「幼稚」な「エキゾチック」な建物に変えた。ドイツや日本の統治下にあった当時から、その側壁に描かれた物語絵が「観光のまなざし」的となるが、バイにおいて男性が他村から送られる女性（モゴル）と出会う制度が公娼制度と解され、バイに宿泊することは「野蛮」な風習と見られた。彫刻家であり民族学者である土方久功の影響により、バイの物語絵がストーリーボードとして旅行者向けの土産物となると、パラオにとってのバイの意味が再び変わってゆく。他方、パラオにおいて土方と親交があった中島敦の短編にはバイの絵物語を題材としたものが見られる。そこでバイは、植民地支配・資本主義システムに服しながら同化されない単独性の表象という意味を与えられている。

タトゥ（刺青）も自然や社会との関係性を構築するための「衣装」であったが、同様に「野蛮」な風習と見なされると、もはやそれは「衣装」ではなくなった。サモアの作家アルバート・ウェントは、タトゥを「衣装」と見るサモア社会の見方を、日本語の「和」という言葉を用いて説明している。「裸」にされた身体に再び「衣装」を着せること、すなわち、植民地支配の影響を受け、資本主義システムに包摂されながらも、単独性を保持した関係性や主体を再構築することが脱植民地化であり、日本を訪れたウェントはそのようなサモアと共通の単独性を日本に見出している。こうした単独性を相互に結びつける場として「オセアニア」を捉える太平洋作家達に呼応する様に、ミクロネシアを訪れた池澤夏樹の小説テキストは、ストーリーボード

と並びパラオを世界と結び付ける、18世紀に初めてイギリスを訪れたパラオ人リー・ボアの「高貴な未開人」のイメージを書き換えている。

(2)中島敦の文学テキストでは、写実主義・言文一致・私小説・文字・歴史への違和（現実・日常生活・存在・自己への懷疑）と、不安な単独性（雑種）を救済することへの希求とが、近代国家以前の世界を舞台に（近代国家以前を描く先行テキストを下敷きに）、アレゴリーを用いて表現されている。この「中心」（文明）からの脱走の文学的实践及び表現は、南洋滞在以前には、非言語的・暴力的・植民地（非西洋）的なもの（先住民）との「混血」（異種混濁）によって「異化」（他者化）を果たすという形を取っている。帰京の目処が立たない南洋（無文字世界）行きには、書くことを前提としているとはいえ、中島自身による脱走（先住民化）の实践と見なしうる側面があるだろう。

一方、そのような、「混血」を「文明化」ではなく「先住民化」と見る視点の取り方（不安／エグゾティシズム）や、その逆（「先住民」の「文明化＝同化」）はありえないという（同化政策と異なる）語り、「混血児」への憐憫は、当時の南洋群島「島民」に関する学問、小説や、旅行記、流行歌と共通していた。（同化政策と共通して）それらが隠蔽・忌避する内地人女性と植民地男性という組み合わせへの強い関心（恐れ）を、中島は1930年代前半の発表作・習作で表していたが、以後の作品では書かなくなる。（だがその関心は、南洋滞在中の日記には記されている。）

南洋で記した日記・書簡・エッセイには、馴致しようとする／馴致された存在への違和感を実感するとともに、「他者」（南洋世界・島民）の目にさらされ、多様性・単独者

に出会い、突き放される体験の中で、「自己（への疑念）」（病気や、家族・仕事・書くことに関する困難）に回帰し、予定外の早期での帰京を決意して行く中島が描かれている。

帰京後の文学テキストにおいて、「先住民化」（南洋呆け）の自覚と「再文明化」（戦時下においてあるべき国民及び作家になること）の要請との下に、島民の目と己の目とを重ねる想像力（混血＝文明化＝異化と見る視角）が獲得されている。それらのテキスト群は、近代国家・帝国（それに対応する言語・言説上の中央集権的装置、及びそれにつきまとう諸矛盾を解決しようとする議論）に降服・敬服しつつ感化されない封建的単独者（非合理的な意志・情熱、独立心、自負心）を表現している。

（3）1980年代、90年代の日本及びハワイの文学テキストには、日本の植民地主義、軍事的侵略の歴史や、観光、「土地開発」等の経済活動、人種やジェンダーの意識を問題系とする「ポストコロニアル」の意識が共通して見られる。太平洋諸島の現地民社会と、太平洋におけるアメリカの政治・経済・文化的覇権との双方に対する日本人の係わりを描くことにより、それらのテキストは日本人の「自己植民地化」の行為と植民地化された「自己」のありようを批判的に表現する。太平洋での文化的な相互干渉や異種混淆、往還的移動を基調とする「ポストコロニアル表象」を通して、「日本」「日本人」を問い直すことが可能である。

一方、日本のテキストが日本の植民地主義に対する太平洋諸島からの「異議申し立て」を描こうとする（池澤夏樹、小林信彦、新井満）のとは比べ、ハワイのテキストは新しい「自己」の表現を創造しようとしている（グリー・バク、クリス・マッキニー、ジェシカ・

サイキ、マリー・ハラ、ジュリエット・コウノ、ロイス＝アン・ヤマナカ、ミルトン・ムラヤマ）。それは暫定的でローカルな「自己」であり、自らへの批判と「他者」への批判を行うとともに「他者」との調和をも模索しながら変容してゆく「自己」である。

（4）「酋長の娘」の表象は、植民地に関わる言説において、「中心－周縁」の権力構造を補完し、それを揺るがしもしてきた。「酋長の娘」とは、非西洋世界あるいは植民地や旧植民地の「代表的あるいは特別な非西洋人女性」を意味する。

一般的な南洋植民地のイメージ形成に大きく与ったのが、石田一松作詞・作曲の『酋長の娘』である。教科書に書かれた、従順な、『君が代』を歌う幼い少女という公式の南洋のイメージを裏返した、自分の部族の踊りの慣習を日本人男性に倣わせる、自己主張の強い「私のラバさん」は、未開の首狩り族の女性となっている。

「南洋」を象徴する「酋長の娘」には、「癒し」「自発的な日本化」と「恐怖」「日本人の南洋化」という、相反する二重のイメージが結びついた。森小弁の妻イサベルや、杉山隼人の妻ロサンのように、日本の習慣や文化を受け入れ、子供を日本人として育てる酋長の娘も存在した。他方では、南洋群島が母系制社会であるために、異人種間の結婚は「先住民化」を意味するという主張が学問の場において行われた。アメリカのアニメーション映画『ベティのバンブー小島』が日本に輸入されると、「酋長の娘」という題で上映された。この作品では、ベティは太平洋の小島の現地人として登場している。

同じく南の島を舞台とする島田啓三の人気漫画『冒険ダン吉』には、『ベティのバンブー小島』や、アフリカを舞台とする別のバ

ティものと極めてよく似た場面がある。『冒険ダン吉』は、当時の一般的な南洋のイメージが荒唐無稽に描かれているだけではない。流行歌の「私のラバさん」と、アニメーションの変幻自在の女性ベティの、「南洋化」「先住民化」の言説を吸収し、それを「日本化」の物語に接続・変換させている。

南洋の「酋長の娘」の表象・イメージには、「文明化」と「先住民化」、「癒し」と「脅威」がせめぎ合い、植民地支配の欲望と不安とが同居している。その表象は、菊池寛と芥川龍之介や、流行歌『酋長の娘』と、ベティ・ブープもの、『冒険ダン吉』の関係に見られるように、変幻自在である。中島敦、池澤夏樹は、この「癒し」と「脅威」のイメージや、変幻自在さを利用し、権力の意のままにならない他者として「酋長の娘」を描き出している。彼らが描いた「酋長の娘」たちは、太平洋諸島の現地作家たちが描く「酋長の娘」たちと共振する形で、太平洋世界における、植民地主義的言説に抵抗する言説を形成している。

(5) 植民地主義的な言説は、「酋長の娘」と植民者男性の「異人種間恋愛・結婚」の題材を好んで用いる。植民地支配者による「異人種間恋愛譚」は、暴力的搾取に基づく関係ではなく、より強固な、相互的な愛情による結びつきと、現地女性の自発的な従属を描く。それは、理想的であり、幻想的でもある植民地支配のあり方であり、ポカホンタスの物語が典型的な例である。異人種間恋愛譚は、現実のいわゆる現地妻との関係、ひいては植民地との関係を美化したロマンスであるといえる。影響力を持ったのがピエール・ロティの『ロティの結婚』(1880年)である。

異人種間恋愛譚は、南洋を訪れたロバート・ルイス・ステューヴンスン、ルイス・ベ

ック、ジョウゼフ・コンラッドによる書き換えが行われた一方で、日本が南洋群島と呼んだ熱帯植民地を統治していた時期、日本人作家によって日本の南洋統治に沿う形にも、またそれに異を唱える形にも書き換えられた。菊池寛が「俊寛」(1921年)で描いた、植民者男性に都合の良い「酋長の娘」を、芥川龍之介は同じ「俊寛」(1922年)で植民者男性を出し抜く女性に書き換えた。反面、菊池も芥川も、互いに異なってはいるが、ともに南洋植民地の癒しのイメージを作り出したことで、「未開だが与し易い」という当時の国定教科書に書かれた強力な言説を補足することとなったといえるだろう。

中島敦は『ロティの結婚』型の異人種間恋愛譚を書き換えている。中島のテキストは、植民地化によって獲得された、あるいは押し付けられた身体や世界観に注目し、「中心-周縁」の境界線の自明性を疑う。そのような南洋を代表する女性が、中島のテキストには登場する。「マリヤン」(1942年)では、中島がパラオで出会った女性を、植民地主義的な異人種間恋愛譚に異議申し立てをする単独者として描き、「夫婦」(1942年)ではパラオの絵物語を、そのような異議申し立ての物語に仕立て上げている。それらは、ステレオタイプと似ているが異なる、土着の伝統と近代化の両方を体現した、特別な女性の表象を通して、植民地主義的な言説へのささやかな抵抗を描く。

中島敦の試みは、サモアの作家アルバート・ウェントによる企てと一致し、池澤夏樹によって引き継がれてもいる。池澤が描く、太平洋を移動する女性たちは、ポカホンタスのように相手男性を救済する力を持ち、相手男性の運命を左右するが、ポカホンタスとは異なって男性の意向に翻弄されたり、悲劇的な結末を迎えたりすることはない。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

須藤直人、中島敦の混血表象と南洋群島：ポストコロナル異人種間恋愛譚、立命館言語文化研究、第20巻1号、49-63頁、2008年、査読無

須藤直人、Postcolonial Negotiations in the Pacific: “Japanese Identities” in Literary Texts from Hawaii、立命館言語文化研究、第19巻4号、293-313頁、2008年、査読無

須藤直人、太平洋の異人種間恋愛譚：植民地口マンスとその「書き換え」、比較文学研究、第88号、37-58頁、2006年、査読有

[学会発表](計3件)

須藤直人、太平洋諸島の「脱植民地化」と日本文化、日本文化デジタル・ヒューマニティーズシンポジウム「海外における日本文学の時空間」、2009年3月14日、立命館大学

須藤直人、酋長の娘：従属/抵抗の南洋表象、日本比較文学会第69回全国大会、2007年6月16日、北海道大学

須藤直人、中島敦の南洋植民地体験：混血表象の変容、シンポジウム「太平洋における日本人・日系人の体験と文学」、2007年3月24日、立命館大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

須藤 直人 (SUDO NAOTO)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：60411138

(2)研究分担者

(3)連携研究者